

# 解説 田植え時に起こる様々なトラブル・疑問

『所々、苗がとんでいる…欠株や浮き苗・枯れ』



田植え時の植付トラブルにおいては田植機の植付爪の摩耗以外が原因であることの方が多いのですがあまり知られておりません…いくつかの代表的なケースの具体例を挙げてみます。

「苗がとんでいる…」  
「苗が植えれてない…」  
「爪を交換してくれ…」



ちょっと待った



それ…  
田植機の爪が原因ですか？

## ①『密集苗』 (厚まき)



籾種をたくさんまいて(厚まき)育てた苗を、細植え(2~3本)でカキ取ろうとすると空振りをして上手く爪がカキ取れずに欠株が発生する場合があります。これを回避するには、苗作りの際に基本に立ち返り、品種に沿った基準通りの籾種量をまくことが重要です(うすまき)

籾種をうすくまくことで苗箱の枚数は増えますが(18~20枚/1反)田植え時では多少苗を大きくカキ取っても細植えが可能だと、苗と一緒に土・根も十分カキ取れるため、確実な植付・そして苗の活着が良好となります!!



最近よく耳にする「密苗」「密播」と混同しないように！密苗は苗丈10cm程まで育て、「稚苗」状態で、時には専用の植付爪を用いて厳格な育苗管理に基づいて行う育苗・田植え農法です。(苗箱数は激減しますが、管理が難しくジャンボタニシの食害が懸念されます)



「密苗」



「慣行」



## ②『根張りが悪い』



これも苗作りの過程で起こることで、苗箱に入れる「床土」や「覆土」の量を規定より減らした場合に起きやすかったり、育苗中の「水管理」において苗(箱)に水分を含ませすぎてしまっても起こります。育苗中に苗を水没させてしまうケースでは頻繁に見受けられます。

また育苗中の水管理で非常に多く発生している問題が「徒長苗(伸びすぎ)」です。徒長苗は苗丈が長く軟弱に育っており、植付時に傾いたり転び苗になったりもし、初期成育が遅れる傾向にあります。

「中苗田植え(奈良ヒノヒカリ)」では、

- ①播種量100~120g乾籾(120cc~140cc以下)
- ②育苗日数30~35日
- ③葉令3.5~4葉
- ④苗丈15cm(※重要)

このようにコントロールの出来た腰の強い健康な苗でなくてははいけません。



根張りが悪い軟弱な徒長苗は田植え時に様々なトラブルを引きおこします。代表例は、田植機の苗台で苗が浮き上がり、カキ取りミスが起こったり、根の張りすぎで水分の保持が悪くなった苗は苗台での滑りが悪く下に降りていかず爪が空振りして連続欠株を起こすトラブルもあります。



ロックウールタイプ



ロックウールタイプの人工軽量育苗マットでは覆土量・水管理・温度管理に注意することをオススメしておきます。(少し高めですが、植物性の軽量マットや軽量培土を推奨)



### ③『深水』



田植え時に田んぼを深水にしてしまう要因・事情はそれぞれあると思いますが「深水」は**浮苗トラブルに直結します**。

水の入れすぎ、上の圃場からの落水による以外で深水になってしまう原因には代かきまでの耕うん(均平)が原因となる場合もあります。田面に高低差がある場合やトラクタロータリ爪の摩耗(※碎土・攪拌出来ていない)によるトラブルもあります。そしてまた、秋春耕うんの遅れや不十分であることにより、それが代かき時にまで影響し何回も繰り返し代かきをやってしまうことで、**田んぼの土がトロトロのペースト状態となり植え付け不良・浮苗・傾き苗が発生するだけでなく、そうした土壌は植付初期の苗の活着や初期成育が非常に悪くなります**。田植え時の水深は一般的に2~3cmで行うのが基本であり、トラブルも少なく済みます。

深水や土壌の状態の不良により、田植機で強制的に深植えに設定することの弊害として、こちらも水温・地温等も関係する根の活着不良による苗の初期成育の遅れの元にもつながります。また最近の化学肥料全盛の米作りにより、圃場の浅い部分だけでも米作りが可能となっているため(品質・食味には目をつむっても)耕うんを極端に浅く土作りされている方も数多く見受けられます。あまりに浅い耕うんであると、田植機のフロート(浮き)が田んぼの地面にすぐ接地して浮苗が出たり、田んぼの地面の固い部分に当たってしまい上手く苗が刺さらず転んでいってしまうこともあります。



### ④その他の苗のトラブル『老化苗』



田植え終了より数日後、「田んぼを見に行ったら苗が枯れている!」というような連絡がごく希にあります。そういうケースでは水稻初期除草剤による薬害や田植え同時施肥体系による肥料アタリを心配されているのだと思いますが、中にはそのどちらでもなく苗枯れの原因がなぜか?田植機...つまり機械に原因があると思いついで農機店に問い合わせされてくることがあります。

一般的によほど悪い条件や偶然・ミスが重ならない限り、薬害や肥料アタリでの枯れは発生しにくいですが、**ほとんどはそれ以外が原因**。

ではその他の原因として考えられる有力な原因が「**老化苗**」です。すなわち**育苗期間が35日以上を超えて**いたり、徒長した苗、植え遅れや深水、活着しにくい土壌などの要因が重なるとさらに老化苗による枯れが発生しやすくなります。当然老化苗は薬害や肥料アタリも起こしやすくなります。(徒長苗もその傾向)(適正な育苗期間、適正な植付条件や時期が大事です)

こうした老化苗による枯れの訴えは田植えシーズン後半に叫ばれることが多いです。苗箱にある苗の状態は青々としていたのに田んぼに植えた後に枯れが生じるため、まさか苗そのものに原因があると理解しにくいのだと思われます。その他にも欠株を心配して必要以上に太植えをしてしまうと、苗・稲がムダに分けつし、株だけが太くなってしまい籾が太く大きくなりやすい事もあります。当然収穫時のコンバインの負担も大きくなるのであまり良いことではありません。



田面に「**藻**」の発生も苗の初期成育を妨げる要因のひとつです。「**藻駆除剤(モゲトン)**」を利用して除去が可能です。さらに苗が枯れる要因の一つに、田植え直前にトラクタで**生草(青い草)**と一緒にすき込みされることで、地中に**不活性ガス**がたまり(臭い)、植えた直後の苗に悪影響を及ぼすこともあります。



### ☑ まとめ

田植え期における苗のトラブルの多くが、フタを開けてみると苗作りさらに土作りに至る段階で自然以外に人為的行為により誘発されている事が多く、田植えの最終段階である田植機が原因でのトラブルは爪の摩耗を除いては少なく、田植機本体で苗トラブルまで対策できる方法は多くありません。

一部の高性能田植機では一般的な機械式ワイヤーによる深さ制御を進化させたマイコン制御により、田面への追従性や反応を高めたモノもありますが、それだけで万事OKということもなく、やはり稲作の基本中の基本である「**苗作り**」を丁寧にを行うのがベストであります(『苗半作』という言葉もあります)手を抜かず土作りや圃場づくりを行い、健康で強い苗を育て(もしくは良い苗を買う)、適正な時期・タイミングに田植えをすることを心掛けましょう。